

「家がいいね」 第75号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2010.8.9

いつまでも お元気で！

美辞麗句とは、このような言葉ですね。相手から言われて悪い気持はしない年代もありますが、高齢者福祉に関係する行政が、日常使う言葉ではありません。「やがて必ずやってくる最期」を見据えて、現実的対応を準備するのが、超高齢社会の時代の誠実な行政と思います。「いつまでも元氣」と考えて、百歳を超える亡者や失踪者を生かし続けたのは、これも漫然と「先送りできる」と考え続けた人たちが、その責めを負うべきと考えます。現実の人の世は摩訶不思議。死んでから何代も土地名義などに生き続ける人もあるのですから。

街頭デビュー

8月8日の昼間、

いせ市民活動フェスティバルが高柳商店街であり、医療と介護の路上相談会を試みました。賑わう街も高齢者が多くを支えると知りました。他人のために輝く皆さん、本当にお元気ですね。



いのちのスープ

(全文引用)

生命の始めから、その終える日まで、人に寄り添ってくれる汁がある。それは煎じて作られたものに多い。煎じるとは、煎じ薬を作る場合の使い古された言葉だが、素材と水、適切な容器と火力によって、自然のたまものを天の露のように受け出す。人類の歴史の中で、探り当てた方法と思う。(中略)これを正直にやる人とやらない人の差は、うさぎと亀。このようなシンプルな仕事においてこそ(中略)自分の姿が見えてくるであろう。若い方々の中には、煎じ仕事……炊き出すなど辛気臭く、自分の暮らしには不必要と思う方があられるかもしれない。しかし元気な人々も疲労にさいなまれる日があるう……大人は見落とすけれど、子供でさえも疲れはある。

まして、いたわらねばならぬ生命への対応は、いつ我が事になるかわからない。他人事ではないのである。身についたものがなくては、いざの時、意のままにならぬ自分を嘆くことになる。

愛につられ、無心に、
よくなるように、
よくなるようにと、
鍋中を見守る。
いつしか天は、
用意のある人をつくり、
いざの時、必ず、
手を差しのべる。



いのちの対話 燃えた八朔の日

8月1日「終わりよければ」いせの会の市民講座は、お陰様で無事終了。

柏木哲夫・内藤いづみ両先生が、熱い思いを語り合って下さいました。

人は死を背負ってこそ人生を振り返る大事業ができる。ホスピスケアは、平等な人間関係として成就し、患者さんの「にもかわらず微笑む」ユーモアが治療者もいたわる。人は身体と精神という個の生命だけでなく、魂や社会性の「いのち」の関係を生きている。かけがえない時間の中で。

(これ、私の感想。余韻の懇談会は縁の家で随時)



自宅での人生を
最期まで支援します

〒516-0805
三重県伊勢市御園町高向 927
電話 0596-20-8104
ファクス 0596-20-8105
mail homecare@kr.tcp-ip.or.jp
<http://www.tcp-ip.or.jp/~takuro>

おしらせ がん患者のサロン 伊勢
毎月第3木曜日(次回8月19日)午後1時半
当クリニックの隣の「縁(えにし)の家」にて